

## &lt; 研究ノート &gt;

## 米国時代のリスト

諸 田 實

## 目 次

はじめに

- 1 米国到着。ラファイエット将軍との旅
- 2 ラッピスト・コロニーの訪問。農場経営の失敗
- 3 「レディンガー・アドラー」紙の編集
- 4 炭坑と鉄道の事業経営
- 5 保護関税運動への参加
- 6 大統領選挙。米国を離れてヨーロッパへ

## はじめに

ドイツの国民経済学者フリードリッヒ・リスト (Friedrich List, 1789-1846) は、1825年6月家族とともにニューヨークに上陸してから1832年夏に最終的に米国を離れるまでの7年余——その間、1830年11月から31年11月までフランス（とドイツ）旅行のために単身で米国を離れていた期間を除くと6年余——、独立から半世紀ほどたった「自由の国」アメリカ合衆国で生活した<sup>(1)</sup>。

36歳から43歳まで7年余にわたる米国での生活（異文化体験）を通して、リストは当時の米国が直面していた経済問題と取りくんで、この新興国の保護関税政策と国民主義学派の経済学の形成に積極的に関わったばかりでなく、国民経済学の体系の構築という後半生の1つの重要な課題を遂行するための基礎を培ったのであった。その意味で、米国時代は57年余のリストの生涯の中でもきわめて重要な時期であった。米国時代の彼はドイツ系市民のためのドイツ語新聞の編集、炭坑と鉄道の事業経営、保護関税運動への参加、大統領選挙での活躍や米国領事就任など、多方面の活動を続けている。なかでも、「ペンシルヴェニア工業・技術

促進協会」の有力なメンバーとの交流のもとに貿易論争に参加して、『アメリカ経済学綱要』（1827年）をはじめ数編の小論を発表して、1820、30年代の米国の保護関税政策と国民主義学派の経済学の形成に重要な貢献をしたことは特筆すべき点であろう。サミュエルソンが「そういうわけで、私はアメリカの重要な経済学者の列にフリードリッヒ・リストの名前をつけ加えたいと思う」と述べていることも、これを裏書している<sup>(2)</sup>。

このような米国時代の体験は、また、国民経済の建設のために奮闘したリストの後半生の活動のための跳躍台にもなった。彼自身『経済学の国民的体系』（1841年）の中で回顧して述べているように、リストの経済学説の核心をなす古典学派の経済学（スミスとセイ）の〔交換〕価値の理論に対抗する生産諸力の理論や歴史的段階説は、米国での生活——「この新しい国で経済学について読むことのできる最良の著作」である「生活」——の中で発酵したのであった。また、前述のように、在米中にみずから炭層を発見し、石炭輸送用の鉄道を敷設してその会社の経営に携わったが、この時の体験はリストに鉄道網の整備こそが地域の経済的統合と国民経済の建設にとって不可欠であることを確信させたのであった。ドイツ語新聞の編集者としての活動が「アルゲマイネ・ツァイトゥング」紙への寄稿や「鉄道ジャーナル」「関税同盟新聞」の編集など、ジャーナリストとしてのリストの活動の素地を作ったことはいうまでもない。リスト自身にとっても、米国時代は後半生の広い活躍の場へ向かう重要な門口であったといつてよいであろう。

米国時代のリストについては、1925年に彼の渡米100年を記念して「世界経済・海運協会」の依頼

で執筆したノッツ (William Notz) の長編の論文があり<sup>(3)</sup>、また『リスト全集』第2巻には米国時代の作品や手紙が、上記ノッツの論文を要約した序論とくわしいコンメンタールとをつけて収録されている。最近では、生誕200年を記念して開催された展示会の「カタログ」に掲載されている評伝の中の「米国時代のリスト」(ライナー, P. ルック稿)と、新資料の紹介を含むヴェンドラーの新研究がくわしい。日本ではリスト研究者ばかりでなく、米国経済史や経済学史の研究の中にも「米国時代のリスト」に關説した作品がある。私は先に、リストの生誕200年に寄せて、展示会の「カタログ」に収録されている評伝の一部分を紹介したが<sup>(4)</sup>、本稿は、それに続いて、以上のような資料と文献を利用して米国時代のリストの活動を紹介したものである<sup>(5)</sup>。

(注)

- (1) 渡米前のリストは西南ドイツのヴュルッテンベルク王国の議員であったが、裁判記録の公開を要求したことから、1822年4月に「政府・法廷・官庁・官吏への侮辱罪」で10か月の実刑判決をうけた。服役を拒んでスイスとフランスに亡命したのち逮捕され、ホーエンアスベルグ要塞監獄に拘禁された。したがって彼の渡米は、出獄の条件としての国外退去(「新大陸への旅券づきの追放」『小林昇経済学史著作集』VIII, 62頁)であった。「市民的自由の亡命者」という点でリストは、三月革命期に市民的自由の実現のために闘って敗れ、米国へ逃れた「48年の人々」(Achtundvierziger)に比較される。
- (2) Eugen Wendler, *Friedrich List 1789/1989. An Historical Figure and Pioneer in German-American Relations/Eine historische Gestalt und Pionier auch im deutsch-amerikanischen Bereich*, 1989, S. 83/84. この本は英・独2か国語で印刷されている。
- (3) W. Notz, *Friedrich List in Amerika*, in: *Weltwirtschaftliches Archiv*, Bd. 21. 22, 1925
- (4) 諸田實「フリードリッヒ・リストと彼の時代——生誕200年に寄せて——」(『経済貿易研究』神奈川大学経済貿易研究所年報No16)
- (5) 本稿ではリストの著作を次のように略記する。  
『リスト全集』: Friedrich List. *Schriften/Reden/Briefe*, hrsg. von E. Beckerath, K. Goesser, F. Lenz, W. Notz, E. Salin, A. Sommer, 10 Bde., Berlin, 1932-35.  
『綱要』: 正木一夫訳『アメリカ経済学綱要——アメリカ体制——』未来社, 1966年。  
『国民的体系』: 小林昇訳『経済学の国民的体系』岩波書店, 1970年。  
『農地制度』: 小林昇訳『農地制度論』岩波文庫, 1974年。  
『遺書』: 正木一夫訳『ドイツ人の政治的経済的国民統一——政治経済学上の遺書——』改造文庫, 1941年。  
そのほか、『カタログ』と略記するのは, *Friedrich List*

*und seine Zeit. Nationalökonom • Eisenbahn-pionier • Politiker • Publizist • 1789-1846*, Stadt Reutlingen, Heimatmuseum und Stadtarchiv, 1989.

日本語で書かれたリスト研究の代表作として、『小林昇経済学史著作集』VI, VII, VIII, XI, 未来社, 1978-79年, 1989年をあげておく。

## 1 米国到着。ラファイエット将軍との旅

リスト一家を乗せた客船ヘンリー号は1825年4月26日フランスのル・アーブルを出港、「30年間かつてなかった」とケンプ船長が嘆いたほどの悪天候の続くなかを43日間の航海を終えて、6月9日午後1時にニューヨーク港に入港した。「万物は歓喜に満ち、胸は幸福で一杯だ。大海原を40日間さまよってきた者だけが感じることのできる喜びだ。われわれも子供たちも、はじめての自由の地に上陸したこの日にふさわしい晴装をした」と、リストはこの日の感動を日記に記している<sup>(1)</sup>。この時、一家はリストと妻のカロリーネがともに36歳、エミリエ6歳、オスカー5歳、エリーゼ3歳、妻と先夫との間に生まれたナイトハルト16歳の6人で、末の娘カロリーネはまだ生まれていなかった。

到着した日のニューヨークは「耐えがたい暑さ」で、妻のカロリーネはそのため気分が悪くなった。「ニューヨーク。この町の第一印象。黒人、家屋、街路、塔、汚物、市庁舎、浴場。」<sup>(2)</sup>一家はペンシルヴェニア州のフィラデルフィアへ向かった。デラウェア河畔の、当時米国第2のこの都市がリスト一家の最初の居住地となり、上の子供はここでノーザン・リバティーズ街区の国民学校へ通うことになった。一家が着落くと、リストは单身ニューヨークへ引き返した。大統領の招待で米国内を周遊中の「独立戦争の英雄」ラファイエット将軍と会うため、7月2日、蒸気船でハドソン河を下ってニューヨーク州庁のあるオルバニーを訪れた。

ラファイエット (Marquis de La Fayette [Lafayette] 1757-1834) はフランスの貴族の家に生まれた。アメリカ独立戦争の勃発が啓蒙の理想に燃えたこの青年の心を動かした。1777年, 19歳

の彼はフランス宮廷や周囲の反対を押し切ってみずから船を調達して独立戦争に参加して勇戦し、G. ワシントンの知遇を得た。彼の活動は米国民から高く尊敬されたばかりでなく自由を求めるヨーロッパの人々にも少なからぬ影響を及ぼした。この時の功勞が酬われたのであろうか、將軍は1824年1月大統領の招待を受け、同年8月賓客としてニューヨークに上陸、南部と西部を周遊したのち25年7月1日にボストンからオルバニーに到着した。リストが將軍を訪れたのはその翌日のことで、將軍の祝宴にリストが出席したことを報じた当地の新聞は次のようなリストの乾杯の言葉を伝えている。「合衆国は過去の共和国と違って、<sup>サブジェクト</sup>臣民の代りに<sup>シテイズンズ</sup>市民を作り出した。<sup>(3)</sup>」

リストがラファイエット將軍を知ったのは3年前である。1822年4月に10か月の実刑判決を受けたリストは、服役を拒んで逃亡中のストラスブールでフランスの自由主義者エイナンの著作『法の歴史』をフラックスランドとともに翻訳したが、リストにとって「神の啓示」となったこの書物は將軍に捧げられたものだった<sup>(4)</sup>。24年4月に友人のフォルレンとアーラウからパリへ行く前に將軍に手紙を出して渡米の可能性を打診している。パリ到着後フォルレンから將軍と親しい哲学教授カズンを引き合わされ、カズンの紹介で將軍と会った。リストの勇氣ある哲学的精神を評価していた將軍はリストに自由主義者として進んで刑に服することを勧め、また、渡米を勧めてロンドンの有力者に宛てて紹介状を書いてくれた。リストはヴェルッテンベルク（ドイツ）への帰国が困難になることを懸念して一度は將軍の勧めを断わったが、25年1月訪米中の將軍から重ねて渡米を催促する手紙を受けると、祖国を離れる決意をする。「私の運命は私にとって1つの鍵であった。その鍵がこの時代の最も重要な、最も高貴な人々の扉を開き、北アメリカについての最良の知識と、だが同時にかの地への最良の推薦状を得させた。〔アメリカ行きの〕船に乗る時にはすでに私はヴェルッテンベルクの議會を退職した時とはまったく別人になっていた。<sup>(5)</sup>」晩年の回顧である。

リストは7月4日から2か月余の間、ラファイエット將軍に同伴して米國東部諸州を旅行し、行く先々で熱烈な歓迎を受けた。独立戦争の戦跡や新しい国制の基礎が築かれた場所をみて、米國の歴史に興味をひかれた。7月4日の48回目の独立〔宣言発表の〕記念日はニューヨークで迎えたが、彼はこの祝祭の光景を旅行の記録にくわしく記している<sup>(6)</sup>。7月14日から25日までフィラデルフィアに滞在したが、その間7月20日には將軍を主賓とする祝宴が財務長官に就任したラッシ（Richard Rush）の主宰で開かれた。この祝宴にリストはティルマン（William Tilghmann）とインガーソル（Charles Jared Ingersoll）から招待されて出席し、インガーソル、ケアリー（Mathew Carey）など、ペンシルヴェニア保護関税運動の有力な指導者を知ることになる。リストとアメリカ国民主義学派の経済学者との接触は渡米直後のこの時に始まったのであった<sup>(7)</sup>。7月25日にフィラデルフィアを立ち、ブランディワインの戦跡、ウェストチェスター、ランカスター、バルティモアを通してワシントンに到着、9月6日將軍はここで68歳の誕生日を祝った。翌7日將軍は大統領アダムズに別れを告げてフランスへ帰ったが、「ブランディワイン」号の船上からもう一度リストに親愛の手紙を送った<sup>(8)</sup>。

將軍に同伴した2か月余の米國旅行は米國に着いたばかりのリストに大勢の有力な友人を作らせた。J. アダムズ、J.Q. アダムズ、H. クレイ、S. ジラード、W.H. ハリスン、A. ジャクソン、Th. ジェファソン、J. マジソン、J. マーシャル、J. モンロー、R. ラッシ、D. ウェブスター。当時、リストほど米國の指導者と多く知り会ったドイツ人はいなかったであろう。それと同時に、米國社会、米國人の生き方はリストに強烈な印象を刻印した。

（注）

（1）『リスト全集』第2巻75頁。

（2）『リスト全集』第2巻76頁。

（3）『リスト全集』第2巻418、419頁。この祝宴はE. ケインの主宰。

（4）この翻訳が『テームス I. 法の歴史、エイナン氏のフランス語の著作から』である。拙稿「フリードリッヒ・リス

トと彼の時代——生誕200年に寄せて——」(神奈川大学経済貿易研究所『年報』16, 1990年) 82頁を参照。エイナンはフランス学士院会員。

- (5) Zur Geschichte des vormaligen deutschen Handels- und Gewerbsvereins, woraus hernachmals der deutsche Zollverein erwachsen ist. (『リスト全集』第1巻I, 72頁) この論稿は1846年に『関税同盟新聞』に発表された。
- (6) 『リスト全集』第2巻79-81頁。ラファイエットとリストは7月4日にオルバニーから蒸気船「チャンセラー・ケント」号でニューヨークへ着き、ブロードウェイのBunker's Mansion Houseに投宿した。
- (7) リストは南米の政治的事件、特に「解放者」(El Libertador) シモン・ボリバル (Simón Bolívar, 1783-1830) の活動に注目して、後述する「レディンガー・アドラー」紙の1826年11月7日号、27年4月3日号に報道しているが、フィラデルフィア滞在中の25年7月に、当時ジャーマンタウンで修学中のシモンの息子フェルナンド・ボリバルを紹介された。『リスト全集』第2巻81頁。
- (8) この手紙(9月7日付)は『綱要』の冒頭に収録されている。旅行中ラファイエットと彼の息子が前の2台の馬車に、リストが3台目の馬車に乗り、特別に歓迎をうけた場合には2000人近い騎乗兵が続いたこともあって、リストの名誉心を大いに満足させたといわれる。將軍は息子にジョージ・ワシントンと名付けたが、帰仏後の1826年11月に息子は、彼と父がリストといっしょに米国を旅行したことを懐しく回想している、とリストに手紙を出している。なお、1826年にラファイエットの名誉を記念してペンシルヴェニア州イーストンに「ラファイエット大学」が設立され、28年2月にリストはその初代学長に選ばれた。しかし、リストは、「レディンガー・アドラー」紙の編集長の契約が30年まで続き、米国の大学で国民経済学の教授の地位を望んでおり、炭坑業と鉄道業に忙殺されていたので、この要請を断わって、代りに別のドイツからの移住者B. イェーガーを推薦した。『リスト全集』第8巻348頁; E. Wendler, a.a.O., S.51-53.

## 2 ラッピスト・コロニーの訪問。農場経営の失敗

米国へ着いて早々、ラファイエット將軍の後ろ楯もあって新世界に温かく迎えられたリストは、米国に定住するために仕事を探した<sup>(1)</sup>。1825年秋のピッツバーグ行きもそのためであった。のちに米国産業革命の中心地となる鉄工業都市について、リストは次のように記している<sup>(2)</sup>。「鑄鉄所、蒸気製粉所。何千丁の鋤のある特許鋤工場。町はまったく美しい。広い街路、到る所でハンマーの音、大工仕事の音、鋸をひく音が聞こえる。煙の中にチクロープ〔ギリシャ神話の巨人〕のように大きな作業場、それと並んで大きな長い赤色の鑄鉄製品や銅、美しい温室の間に煙でくすんだ黒い

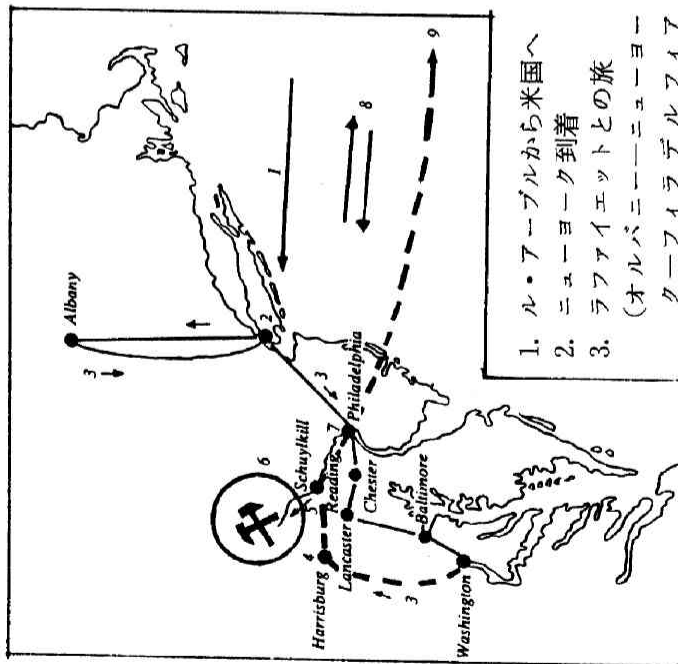
板小屋がたくさん立っている。木の幹までも石炭で黒ずんでいる。」

ピッツバーグから遠くない所に、ヴェルッテンベルクの麻織物工であった敬虔派で分離派のラップ (Johann Georg Rapp, 1757-1847) の指導のもとに作られた宗教的植民団のコロニーがあった。ラップは1803年に渡米、ペンシルヴェニア州バトラー郡に6000エーカーの土地を求めて、翌4年7000人ほどの信者と最初のコロニー「ハーモニー」を建設した。このコロニーは財産共有制をめぐる分裂したのち1815年にメノナイト (メンノー派) のツィークラーに売却され、ラップはインディアナ州ボジー郡に3万エーカーの土地を取得して「ニューハーモニー」を建設した。ロバート・オーエンが消費共同生活のモデルコロニーの建設をめざして1824年に購入したのは、この「ニューハーモニー」である。ラッピストはその後ふたたびペンシルヴェニアに帰り、ビーヴァー郡に第3のコロニー「エコノミー」を建設した。

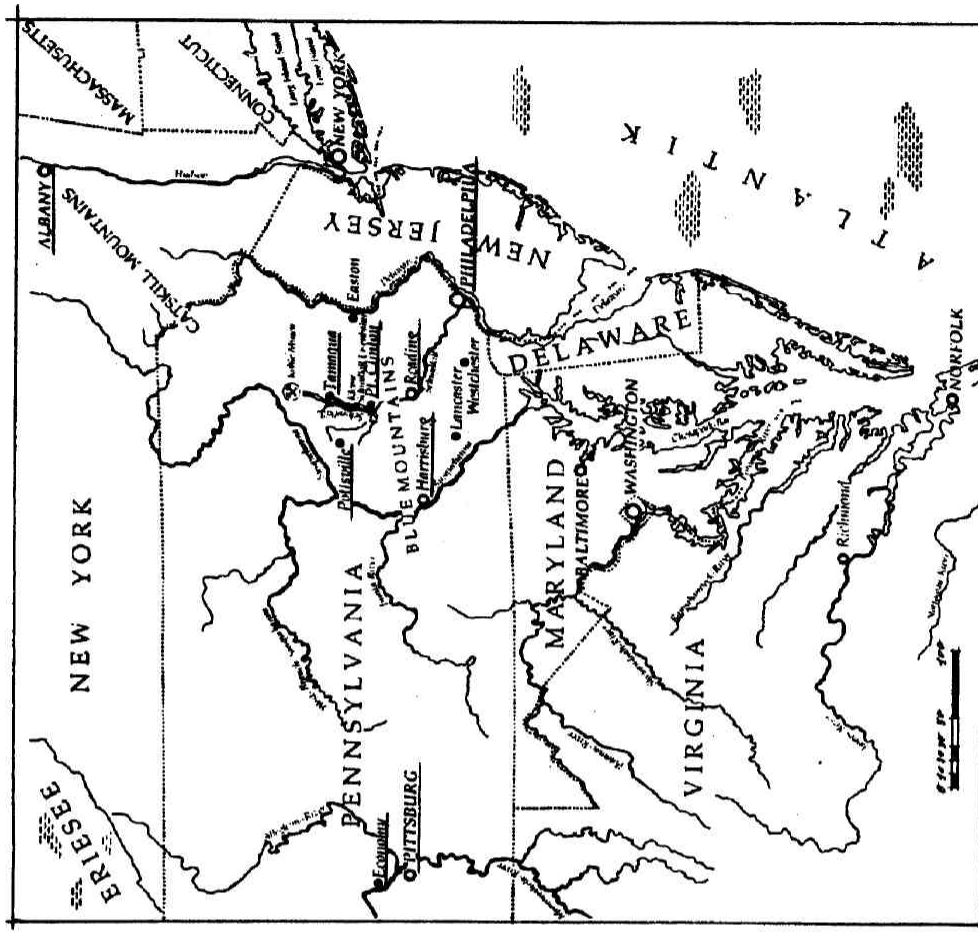
ピッツバーグへ行った折りに、リストはこのコロニーを訪ねてラップと食事を共にしている。「できてから1年にしかならないのに、人々はみんな何不自由なく純粋に暮している。15か月前にはここはまだ森だった。楽しいな満足げな顔つき。100軒ほどの家、2枚の風車の羽根のある大きな工場、教会、宿舎、指導者の家は2か月以内に完成するだろう。この家の後ろには素敵な庭がある。数モルゲンの広さで、ぶどう園、各種の木々、オレンジ、レモン、いちじく、恐らくアメリカの植物、綿、タバコ……。仕立場、製靴場、桶屋の仕事場、車大工の仕事場、皮鞆場、帽子製造場、薬局と調剤室、鍛冶場、煉瓦焼きかまど、大型の打穀機と刈込機が備えつけてある。衣服や靴の必要な者は事務所へ行って支給を受ける。病人は薬局へ。誠実で平和的で隣人に親切な人々の協力をこの国に作り出すことができる、とだけ言っておこう。<sup>(3)</sup>」「アメリカにおけるヴェルッテンベルクの植民団の実践的・宗教的共産主義に対する温い共感<sup>(4)</sup>」と同時に、リストはこの実験に疑問も感じていた。「オーエンの計画が成功するかどうか? さまざまな要素。……要素は最善と



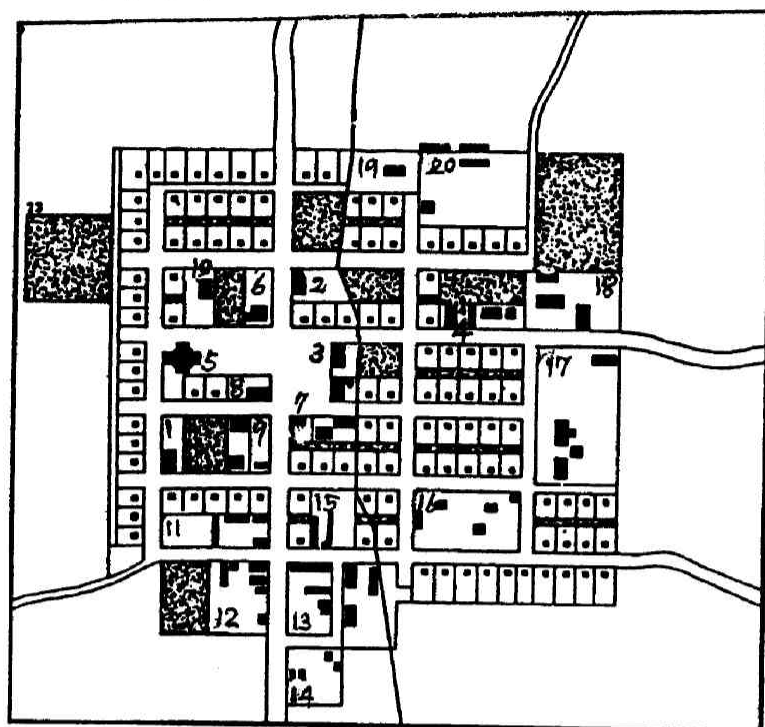
米国時代のリストの旅程と滞在地



1. ル・アープルから米国へ
2. ニューヨーク到着
3. ラファイエットとの旅  
(オルバニー—ニューヨー  
ク—フィラデルフィア  
—ウェストニッチェスター  
—ランカスター—バル  
ティモア—ワシントン)  
を購入
4. ハリスバーク近郊に農場
5. レディングへ引越す
6. 炭坑と鉄道の経営
7. フィラデルフィアへ引越す
8. 単身でヨーロッパへ旅行
9. 家族とともにドイツへ帰る



ラピスト・コロニーの見取図(ニューハーモニー)



- |       |        |    |          |
|-------|--------|----|----------|
| 1 ~ 4 | 寝室     | 13 | 納屋       |
| 5     | 教会     | 14 | 煉瓦焼きかまど  |
| 6     | ラップの住居 | 15 | 製粉所      |
| 7     | 店舗     | 16 | 製材所      |
| 8     | 居酒屋    | 17 | ぶどう園     |
| 9     | 仕事場    | 18 | 倉庫       |
| 10    | 穀物倉庫   | 19 | 醸造場      |
| 11    | 家畜小屋   | 20 | 納屋と火酒醸造場 |
| 12    | 皮なめし場  |    |          |

は思われない。<sup>(5)</sup>」

翌年リストはニューヨーク州知事クリントン (Dewitt Clinton, 1769-1828) 宛ての手紙(草稿)に、「エコノミーのラップ氏の施設、あるいはニューラナークやニューハーモニーのオーエン氏の施設」のような施設を計画している、と記している<sup>(6)</sup>。ただし、家族と暮す1000人の代りに同じ数の13歳から16歳までの若者を収容して教育するというもので、食料と衣料を自給生産し、1日「7時間は労働、5時間は教育」にあてる。学習のあとの回復のための労働、労働のあとの回復のための学習。生徒を才能に応じて2つのグループに分け、1組は科学・工芸職業教育、他の1組は工業と農耕の習得、と考えていた。この草稿は実

際に清書して投函されたかどうかわからない。しかし、次に述べる「レディンガー・アドラー」紙にオーエンやラップ植民団に関する記事を何度も載せていることから、当時のユートピア社会主義の実験に対するリストの関心の強さがうかがわれる<sup>(7)</sup>。

「田舎で暮そう」と決めていたリストは、この年の秋、ペンシルヴェニア州の州都ハリスバーグの郊外に住居付きの10アッカー(1アッカーは40.47アール)ほどの小農場をバルマーから購入した。英語が上達するまで農業で暮らしをたてる、というのが当時のドイツ人移住者に一般であった。「家は大変広く、すこしお金をかければずっときれいになるだろう。下の見取図を見てください。家と

農場——牧草地ではない——はすべて丘の上であり、町から1/4マイルしか離れていない。町の眺めが素晴らしく、ペンシルヴェニア州議会場が正面に見える。十分に広いことがお前にもわかるだろう。台所の他に全部で7室。全部床材が張ってあって、漆喰を塗ってある。どの部屋にも暖炉がしつらえられて、家屋とバルコニーの外壁は銀色に塗られている。道路は賑やかで、この場所は澱粉工場や煉瓦工場を建てるのにも向いている。……要するに、われわれが当分、静かに快適に暮らすことができ、楽園に改造することもできる場所だ。」「私が〔この農場の〕購入について話した人はだれでも、1.値段が格安で、2.収入をあげるのに良い場所にあり、3.数年のうちに3倍に値上りする、とって私の幸運を願った。<sup>(8)</sup>」購入価格は920ターラー（1050ドル）、うち500ターラーを即金で、残額を1年以内に支払う、という条件で、11月19日に売買契約に署名した<sup>(9)</sup>。

しかし、一家にとって「楽園」となるはずの農場の経営にリストは失敗した。農場を買ったのが冬に入ろうという時期で、しかも作付けされていない畑だった。最初の収穫まで長期間待たねばならず、その間慣れない気候風土のもとで農作業が必要であったが、乳牛12頭を購入してみたものの、これまでに農作業の経験のない「ラテン語の農夫」（lateinischer Bauer）のリストには不可能であった。結局、買い手も借り手も見つからないままに農場は放置され、渡航費と異郷での生活費、それに農場購入資金1000ドル余の回収の見込みがたたず、一家の経済状態は苦しくなった。

「私は家族と悲惨な冬を送っています。頼りになりそうな相談相手が1人もいません。収入の道が見つからないので、10か月間に何もかもが値上りするなかで、用意してきた資金のほぼ三分の一を費消してしまいました。食いつくさないようにハリスバーグの近くに小さな地所を買って、自分で畑を耕し、気晴らしに火酒の醸造をしています。先のことは天のみぞ知ります。しかし、私は勇気と威厳をもって運命に耐えていくつもりです。<sup>(10)</sup>」

「私はいま当地で1人のアメリカ農民の生活を

送りながら、そのかたわら、1冊の著作のための材料を集めています。この著作は、この西の世界の最新の学問的に価値のある事柄を含むことになるはずです。〔ザクセンの出版業者の紹介を依頼する文章に続いて〕それはそれとして、正義の日の夜明けが将来いつか私にも到来して、私をふたたび祖国に連れ戻すであろうと期待しています。フランスとイギリス、特に北アメリカを旅行して、この国の国民経済学と政治生活の高い学校（hohe Schule）から学んだことを祖国のために利用できることが、私の最も喜ばしい考えの1つです。現在ヨーロッパは大きな危機の前夜にあるように思われます。当地で話されるのは、農耕と牧畜、商工業、運河と鉄道、選挙と新しい法律のことばかりです。アメリカで生まれた人は十分に幸福を感じるでしょうが、〔われわれ〕移住者はドイツ人の心暖かさと誠実さ、社交性と生の喜び、ワイン、詩、歌と音楽がないのを寂しく思います。私のように当局の監視という不断の嫌がらせを逃れてきた者だけが、この欠乏に耐えられるのです。<sup>(11)</sup>」

「それで私は工業化学、機械、鉱業、農業、要するにすべての産業論の基礎を熱心に勉強した。機会さえあれば、農耕、製造業の各部門、商業の実務を習得し、新しい言葉〔英語〕に習熟しようと努めた。話題に困らないように〔米国の〕歴史と政治を学んだ。それどころか医学さえも私には無縁ではなかった。いざという時のために、救急術を規則的に学んだのちに、医学の実際に没頭する決心をしたのだ。北アメリカの国制とすべての社会的・経済的事情をくわしく学ぼうとしたことは言うまでもない。<sup>(12)</sup>」

異文化の中で迎える最初の冬、しのびよる生活の不安と抑えても抑えても抑えきれない望郷の思

年	面積	人口
1790年	864,746 <sup>平方</sup> マイル	3,929,214人
1820 "	1,749,462 "	9,638,453 "
30 "	"	12,866,020 "
1970 "	3,536,855 "	203,235,298 "

いに襲われながら、懸命に生きていたありさまが  
うかがわれる。

(注)

- (1) 当時のアメリカ合衆国は24州からなり、面積と人口は前頁の表のとおり。ドイツからの移民はリストが渡米した1825年には450人であった。『アメリカ歴史統計』8, 106頁。
- (2) 『リスト全集』第2巻85頁。
- (3) 『リスト全集』第2巻88, 91頁。リストが訪ねたコロニーは「エコノミー」であったと思われるが、10月3日付けの妻への手紙の発信地は「ビッツバーグ郊外ハーモニー」となっている。書き間違いであろう。この手紙には「8日間当地にいる」と記されている。なお、『リスト全集』第8巻には、9月20日付けのビッツバーグからの妻への手紙が収録されている。
- (4) 『国民的体系』第3編第32章の中の「サン・シモン主義者」につけられた編者の1人ゾンマーの注。『リスト全集』第6巻608頁。
- (5) 『リスト全集』第2巻90頁。
- (6) 『リスト全集』第2巻295頁。これと同様の「労働学校」(Arbeits-Akademie)の構想を『鉄道ジャーナル』誌の中でも述べている、という。
- (7) 「レディング・アドラー」紙の1826年12月12日号、1827年7月3日号、11月27日号、1828年1月8日号など、ラップと文通もしたという。『リスト全集』第2巻88, 279頁。『農地制度』132-136頁でもこの植民団に触れている。リストはラップについて「誠実な考えの、平和を求める、同胞に親切な人」と、またオーエンについて『静かな、鋭い研究心の持主』と記している。ただし、この時にはすでに、『新社会観』(1813/14年)における、「法改革による資本主義社会の浄化」から『ラナーク州への報告』(1821年)における「あたらしい社会組織による克服」(永井)へと進む「ロバート・オーエンが人類の知識にたいして重要な貢献をした」(コール)8年間は過ぎていた。永井義雄『イギリス急進主義の研究』第3章；オーエン、永井・鈴木訳『ラナーク州への報告』解説、を参照。なお、ヴェンドラーは、関税同盟新聞の編集者としてのリストに会見を申しこんだ、これまで未知の・日付け不明の・ベルギーの社会主義者J.B.ジョバードの手紙を紹介している。『今晚あなたと、われわれが共有しているように思われる社会主義の理念について話し合うことを、私がどれほど望んでいるかおわかりでしょう。』E. Wendler, *a. a. O.*, S. 62-63。
- (8) 1825年11月5日付のハリスバーグから妻に宛てた手紙。『リスト全集』第2巻332-334頁。
- (9) この屋敷は当時サスケハナ・タウンシップのワインヒルにあった。1834年にフォクス家が購入し、4年後にマクファーランド家の所有に移った。リスト一家の住んでいた家屋は取り壊されて、現在の家は1875年に新築された。ベレビュー・ロード21021に現存し、“Breeze Hill”と呼ばれており、農場の跡には美しい家がたくさん建っているという。E. Wendler, *a. a. O.*, S. 55-56。
- (10) 1826年3月1日頃ラファイエットに宛てて書かれた3通の手紙のうちの1通の草稿。『リスト全集』第8巻337-338頁。
- (11) 1826年3月初ヴァンゲンハイム宛ての手紙の草稿。『リスト全集』第8巻346-347頁。ヴァンゲンハイム(K. A. v. Wangenheim, 1773-1850)はヴェルッテンベルク王国政

府高官、1811年テュービンゲン大学監督官、1816年文教大臣、当時この国の改革派の中心人物で、若き日のリストは彼の懐刀であった。

(12) 『リスト全集』第1巻II, 72頁。

### 3 「レディング・アドラー」紙の編集

ハリスバーグとフィラデルフィアのほぼ中間、ペンシルヴェニア州パークス郡に、主としてシュヴァーベンとヘッセン出身のドイツ系の住民からなる人口5000ほどの小都市レディング(Reading)があった。ブルマウンティンのなだらかな山のふもと、スクールキル河が大きく弯曲して流れる絵のように美しい町である。「ペンシルヴェニアを合衆国の果樹園に改造したのはドイツ系住民です。<sup>(1)</sup>」「北アメリカで規則正しい垣根をめぐらし、最もよく手入れのとどいた果樹園の真中に宮殿のように大きな納屋が小さな住宅に並んで立っているのを見れば、この農園の所有者はドイツ人だということがわかる。<sup>(2)</sup>」といわれるように、勤勉なドイツ系移民の作りあげた豊かな農場や果樹園が広がっていた。レディングはまた発達した農村工業都市で、この地域の交通の中心であった。1827年には325の製粉・搾油・製材所、86の皮鞣場、10の製紙工場、252の醸造場、17の鍛鉄所、7の熔鉱炉、16の梳毛・紡毛工場と1つの羊毛工場があり、ここでは500人が毛の帽子の製造に携わり、製品を南部諸州に売っていた。フィラデルフィアへはスクールキル運河が通じ、1826年には小麦粉、石炭、鉄、ウィスキーなど約3万トンの貨物が運ばれていた<sup>(3)</sup>。

ここの勤勉なドイツ系住民は独自の習俗を維持する頑固な人々で、いわゆる「ペンシルヴェニア・ドイツ語」を使っていた。したがって、この町に米国で最も古く・発行部数の最も多いドイツ語の地方新聞が発行されていたのは、不思議ではなかった。それが「レディング・アドラー」(「レディングの鷲」)紙で、発刊は1796年、1823年にJ. リッターが買いとり、「パークス郡のバイブル」と言われるほど読者の信用を集めていた。毎週火曜日に4頁——ただし第1面と第4面



は広告で記事は第2面と第3面——、4段組みで発行され、年間購読価格は1ドル、定期購読者は約2500人であった。農場経営に失敗したリストは1826年8月、このドイツ語新聞「レディング・アドラー」の編集を依頼された。その事情を伝える手紙が2通ある。

「3週間ほど前にわれわれは引越しました。われわれはいま、フィラデルフィアから20時間ほどのレディングに住んでいます。この町で私はある印刷所と書店およびあるドイツ語新聞の共同経営者になりました。以前の所有者で私の現在の共同経営者は、高齢と病身のために、店の所有権の半分をもって事業全体の指導を引受けることを私に提案しました。彼の新聞は内容的にも経営的にもペンシルヴェニアで1番良いので（2500人の購読者がいます）、もう1度引越すのは骨が折れますが、私は喜んでこの提案を引受けました。私の共同経営者のジョン・リッター氏は生粋のアメリカ人で、お金もありきわめて公正な人物で、われわれに好意的です。ですから私は当地で快適に仕事を続け、かなりの収入が保証されていますし、妻にとってもここは非常に良いようです。(4)」

「私の事情について当地では不平を言うことはできません。私は当地のドイツ語の（週刊）新聞と次のような契約を結びました。私が政治記事を書いて、十分に暮してゆける給料を受けとるのです。契約は1830年までですが、その時には私はどこかで国民経済学の教師として——そうなることが最大の望みです——踏み出すために、市民権だけでなく英語の力も十分に獲得していることでしょう。(5)」

リストがこの新聞の編集を始めたのは——編集者の交代は紙面に公告されなかった——遅くとも1826年9月で、以後、記事の内容も文章もよくなっているという。年俸700ドルの安定した仕事が見つかったので、一家はレディングに引越した。最初はペン通りにある「アドラー」の印刷所のうしろの4室に住み、のちに北5番通りに家を購入して、30年の夏までここに住んだ。末の娘のカロリーネは1829年1月20日にここで生まれた。

「レディング・アドラー」紙（1826年11月21日

号）にリストはジャーナリストとしての自分の義務について、次のように書いている。「一般的な場合と同様にこの特別の場合にも、われわれはわれわれの職務義務を大事なことと思っている。紙面にその場限りの興味を与えたり、教訓的に、また面白く見せかけたりするために、われわれは決して空中樓閣を築かないであらうし、また、読者が軽薄な栄光に名をとどめようと試みて肋骨を折らないかどうかを考慮せずに、この空中樓閣を読者に真実であると吹聴しないであらう。これに対して、十分に調査した結果きわめて有益だとわかった新しい企画については、われわれは声を大にして発言することを躊躇しないであらう。(6)」

リストが編集を引受けていた4年間に「レディング・アドラー」紙の定期購読者は3600人に増加した。リストの執筆した記事には最初の頃には経済問題が多く、のちには国民的・政治的な性質の時事問題がふえた、とノッツは述べている。紙面が限られていたので短編で、一番長い論説は26年11月1日から5回に分けて連載された「ペンシルヴェニアのぶどう栽培」であった。歴史学派経済学の泰斗ロッシャーはリストを「まさしくこれまでの最大のジャーナリスト」と呼び、ジャーナリストとして政治的・経済的問題において世論に及ぼしたリストの影響の大きさをレッシングのドラマトゥルギーが及ぼした審美的影響の大きさと比較している(7)。

「レディング・アドラー」紙の編集を引受けてレディングに移った翌年、リストはレディング・フリーメイスン団に入団した（試験は2月7日、入団は3月7日）。「フリーメイスン団ロッジ、62番 F&A.M.」というのが彼の番号である。最初は徒弟位階に入り、4月5日に職人位階に、5月2日には上級の親方位階に昇進した。しかし、リストのフリーメイスン団での活動は短期間で終わった。フリーメイスンは周知のようにイギリスで始まり、ヨーロッパから米国に広まった世界最大の国際友愛団体である。リストがこれに加入したことはその後の彼の活動にとっても何がしか効果があったであらう、とザリーンは推定している。『国民的体系』の扉にある「祖国と人類のために」

(Et la patrie et l'humanité) のモットーはフランスのロジの標語であった。ラファイエット將軍、スイスの政治家フォン・エッフィンゲン、フィラデルフィアの銀行家ジラルド、小スクールキル鉄道のパートナーのヒースター博士、大統領ジャクソンもフリーメイスンであった。

(注)

- (1) 『リスト全集』第2巻260頁。
- (2) 『遺書』79頁。
- (3) W. Notz, a. a. O., S. 211, E. Wendler, a. a. O., S. 65.
- (4) 1826年10月4日付の Stahl & Federer 宛ての手紙の草稿。『リスト全集』第8巻348頁。フェデラー (F. Federer, 1799—1883) はシュトゥットガルトの銀行の所有者。渡米に際してリストはこの銀行に一般代理権を委任した。『リスト全集』第2巻68頁の脚注。
- (5) 1827年7月半ばのゲレス宛ての手紙の草稿。『リスト全集』第8巻351頁。ゲレス (J. v. Görres, 1776—1848) はナポレオンに敵対した「第5の強国」といわれたコブレンツの“Rheinische Merkur”の編集者。1819年に解任・追放されてフランスとスイスへ逃亡、26年にカトリック運動の精神的指導者としてミュンヘン大学に職を得た。なお、『リスト全集』第2巻の「序論」には、宛先人不明(恐らくゾーデンかバーダー)の手紙の草稿の一部が引用されている。この手紙はゲレス宛ての手紙と同文で、ただ給料のあとに「700ドルの」という言葉が入っている。『リスト全集』第2巻11頁。
- (6) W. Notz, a. a. O., S. 213, 214; E. Wendler, a. a. O., S. 66, 67. 当時のリストの思想を知る材料を紹介すると、——1. 1828年にギリシャの自由主義運動が世界中に広い共感を獲得した時、リストもこの運動を支持し、「アドラー」紙の読者に、マシュエ・ケアリーの指導でフィラデルフィア市民によって組織された救援事業を生活物資の拠出によって促進するように呼びかけた。2. 南アメリカの偉大な解放の英雄「解放者」シモン・ボリバルによって、当時、成功裡に遂行されていたスペインの支配からの解放は、リストにおいて温かい弁護人を見出した。3. 同じような好意をリストはアメリカの原住民に対しても表明した。W. Notz, a. a. O., S. 227.
- (7) E. Wendler, a. a. O., S. 67, 68. ヴェンドラーによれば、G. Mollat, *Kernsprüche und Kernsätze aus Friedrich Lists Schriften*, Leipzig, 1908, には、すべての引用句辞典に匹敵する金言が含まれている、ということである。

#### 4 炭坑と鉄道の事業経営

レディングのあるパークス郡の北隣りのスクールキル (Schuylkill) 郡では、18世紀末以来、石炭を産出することが知られていたが、リストが渡米した1825年になって石炭ブームが到来し、人々は新しい炭層の発見に血眼になった。リストもみ

ずからポッツヴィル (Pottsville, レディングの北北西70マイルほど) へ行って調査した結果、炭層が北東の方向へ伸びていることを確信し、そこから東北東に30マイルほどのスクールキル河の第2の水源地(小スクールキル河)の付近(現在タマクア Tamaqua 市のある辺り)に無煙炭の豊富な炭層を発見した。その近くのマハノイ峡谷にも炭層のあることがわかった。彼は格安の値段で坑区を手に入れた。

のちに「ザクセンの鉄道制度論」(1833年)の中でこの炭坑について次のように記している<sup>(1)</sup>。「これらの炭坑は恐らくこれまでで最も豊富なものである。タマクア付近にはほぼ垂直に50本の石炭の層があり、その幅は最大のもので60フィート、最小のもので8フィート、海拔900フィートで、深さは100フィート掘ってもまだ底に達しない。1本の炭層の開発に英国では8—10万ポンドの費用がかかるが、ここでは掘り出した石炭で支払われる。1トン即ち20ツェントナー掘り出すのに、日給1¼—1½ドルとして60セント即ち20グロッシェン以上はかからない。」

炭坑の開発には輸送のための交通の整備が必要である。ペンシルヴェニア州では道路が主要な交通手段であったが、1820年頃から人口増加や鉄・機械・石炭の需要増大に伴って水路の整備が急速に進んだ。そして、エリー運河網(ニューヨーク州)を手本に1840年頃までにその3倍の水路網が完成することになる<sup>(2)</sup>。

最初の大規模な運河の建設は「スクールキル水運会社」によって1815年に着工され、スクールキル河を改修して水門とダムを利用するスクールキル運河(全長108マイル)が1825年5月までに完成した。これによってフィラデルフィアとポート・カーボン (Port Carbon, ポッツヴィルの北) の間が航行可能となり、フィラデルフィアはポッツヴィル炭田からこの運河を利用して直接石炭を供給されるようになった。1826年の石炭輸送量は1.7万トン(船荷全体の1/2)で、小麦粉、木材、ウィスキーを大きく引離し、32年には21万トン(船荷全体の2/3)にふえている。26年2月には「スクールキル東区水運会社」(1815年設立)がタ

マクア〜ポート・クリントン間の運河建設の認可をペンシルヴェニア州議会から獲得した。小スクールキル河も航行可能になることが期待された<sup>(3)</sup>。

しかし、この会社は必要な建設資金を調達することができず、また地質調査の結果、運河の建設は困難だとわかった。リストはペンシルヴェニア州知事の甥のヒースター博士<sup>(4)</sup>と協力して、タマクアの炭坑とポート・クリントンの間を運河でなく鉄道で結ぶことを会社に働きかけた。その結果28年4月、会社は運河の代りに鉄道建設の認可を得た。米国で（恐らく世界でも）最も早い鉄道建設計画の1つであろう<sup>(5)</sup>。3年以内に着工し、遅くとも7年以内に完成する計画であった（1831年秋に開通した）。この時リストは運河より鉄道建設を主張したが、その理由を『北米通信』（1828年9月1日付の第5書簡）の中で次のように述べている<sup>(6)</sup>。「当地でも意見は分れていますが、多数意見は最近では鉄道に賛成です。その理由は、1. 氷結や大雨による不通〔期間〕がずっと短く、2. 建設費と維持費がずっと少額で、3. 工事がずっと早く進行し、4. 輸送がずっと迅速で、5. 不測の障害がずっと少なく、6. 建設中にも出来上った区間から利用できるからで、この事情は建設費をいちじるしく引下げ、工事を続ける勇気と努力を保ち、増大させます。」

リストが炭坑を発見し、坑区を購入したのはこの頃だと思われる。彼は鉄道建設を決意して用地の買収に乗りだした。彼が提示した条件は、所有地の半分を有利な価格で譲ってくれれば5年以内に小スクールキル河沿いにクリントン（スクールキル運河の港）まで鉄道を建設する、というものだったが、鉄道建設による土地の値上りを見込んで全員が売却に同意した。最初の用地買収契約は1828年12月に結ばれ、29年初めには最大の地主フィラデルフィアのモルガンが6000アッカー余を売却した。2000ドルの年金を少なくとも10年間支払う条件であった。必要な用地8125アッカーの買収に6万1050ドル、全長20マイル余の路線の建設に4万ドル、合計約10万ドルの資金が必要という見積もりであった<sup>(7)</sup>。「こうして将来の採鉱に特

別の価値をもつ1万アッカーの炭田と1万7000アッカーの森林の所有権が、2つの町〔炭坑の中心の町と鉄道から運河へ積みかえる運河沿いの町〕の建設に当然定められた土地の所有権とともに確保されたのちには、鉄道建設に100万ドルを前払いしてくれる資本家をさほど困難なく見つけることができた。事業が完成したらすぐ土地を売れば少なくとも3倍の金額が得られるだろう、ということを彼らに容易に納得させたからである。<sup>(8)</sup>」晩年（1845年）の回想である。

「スクールキル東区水運会社」は1829年4月23日に「小スクールキル水運・鉄道・石炭会社」（The Little Schuylkill Navigation, Railroad and Coal Company〔資本金70万ドル〕と改称され、ヒースターとリストが代表に選ばれた。2人は10万ドルの融資を求めてフィラデルフィアのジラルド銀行と交渉に入った。この交渉は契約書の草案を作成するところまで進んだのに不調に終り、結局、12月にフィラデルフィアのトーマス・ビドル銀行と契約が成立して20万ドルの融資を受けることができた。その間に会社は株式を募集し、ヒースターが社長、リストが副社長（6人の取締役の1人）に就任し、2人は私有する坑区の大部分を会社に売却して会社の株を取得した<sup>(9)</sup>。

工事は1830年夏から1年半かかって、翌31年11月にタマクアとポート・クリントン間全長22マイルが完成した。工事を指導した技師は30年6月に採用した27歳のロビンソンで、彼はのちに初期鉄道時代の技師として名声を得る。レールには鉄を被せた木製レールを使うことにして英国に発注、蒸気機関車も2台（コメット号とカタヴィサ号）リヴァプールのエドワード・バリー会社に発注した。11月18日の開通式当日、一番列車（馬に牽かれた客車と貨車、蒸気機関車は33年初めに納品、4月から運行）が通ったのち、タマクアのキースキー・ホテルで祝宴が開かれ、社長のヒースターは挨拶の中で、ヨーロッパ旅行中（31年10月10日ル・アーブルで乗船、米国へ）のリストの功績を讃えた。

「……われわれの仕事の成功がいかにリスト教授の才能と英知と堅忍に多くを負っているかを認めることは、私の最も喜びとするところでありま

す。……私は乾杯の言葉をこう申します。リスト教授——無煙炭をヨーロッパ市場に売りこもうという教授の努力に感謝して。<sup>(10)</sup>」

ヒースターは1832年4月に社長を退き、33年から「フィラデルフィア・レディング鉄道会社」の設立に携わった。この会社は米国最大の鉄道会社の1つに発展し、リストが関係した上記の会社も1863年に吸収された。リヴァプールのパリー会社から蒸気機関車が届いたのはリスト一家が米国を去ったあとで、試運転の結果、鉄を被せた木製レールでは弱すぎるのがわかり、鉄製レールに取りかえねばならなかった。タマクアとポート・クリントン間22マイルを3トン積みの貨車16輛をひいて2時間半で走り、1日2往復、ほぼ200トンの輸送能力であった。定期的に石炭を輸送する蒸気機関車としては米国で最初である。この鉄道は最初の10年近く赤字であったが、1840年に延長してからフィラデルフィア、バッファロー、ナイアガラの滝を結ぶ路線の重要な1区間になった<sup>(11)</sup>。

小スクールキル鉄道は急速に発展する米国の鉄道網の中のほんの1区間にすぎないが、この時の経験は米国の鉄道ばかりでなく、リストによってドイツの鉄道建設にも役立てられた。ただし、リスト自身はこの仕事からあまり金銭的な利益を得なかった。彼は所有する会社の株を1830年に1070株、32年に535株ビドル銀行に担保に入れたが、さらに帰独後の36年9月にヒースターに手紙を送ってビドルからの借金を申しこんでいる<sup>(12)</sup>。1837年の恐慌でビドル銀行が破産した時、リストが預けていた全財産も失われた。

(注)

- (1) Über ein sächsisches Eisenbahnsystem als Grundlage eines allgemeinen deutschen Eisenbahnsystems und insbesondere über die Anlegung einer Eisenbahn von Leipzig nach Dresden. 『リスト全集』第3巻I, 156頁, 注1; E. Wendler, a. a. O., S. 69.
- (2) 『カタログ』122頁。
- (3) 『カタログ』122頁。E. Wendler, a. a. O., S. 71.
- (4) ヒースター (Dr. Isaac Hiester, 1785-1855) はレディングの医師でパークス郡医師会の初代会長。のち「小スクールキル水運・鉄道・石炭会社」「フィラデルフィア・レディング鉄道会社」の設立に携わる。彼の家はリストが最初に

住んでいた「レディング・アドラー」の印刷所の隣りにあって、2人は生涯友人であった。1827年3月リストがレディングのフリーメイソン団の徒弟位階に入団した時、ヒースターは名誉親方であった。『カタログ』131頁注55。

- (5) 1829年以前にはペンシルヴェニアにも、合衆国の他の州にも、こんなに長い鉄道はなかった。1809年にTh.ライバーがペンシルヴェニアで採石場から石材を輸送するための最初の鉄道を建設し、1816-18年に石炭輸送用の鉄道がさらに2本建設された。続いて27年に長さ9マイルの鉄道、28年に1マイルほどの鉄道、29年に4マイルほどの鉄道が建設された。これらの場合、貨車は労働者(人力)によって牽かれ、押された。リストはペンシルヴェニア最長の鉄道の建設を計画し、人力や畜力でなく蒸気機関車の採用を計画していた。E. Wendler, a. a. O., S. 72.

リストは前記「ザクセンの鉄道制度」論の中で、「すでに1827年に私は北アメリカで、この種の最初の大規模な企業の一つのために——この企業はすでに1830年以来活動しています——資本金50万ドル(およそ70万ザクセンターラー)の株式会社を設立することに成功しました」と記している。前掲箇所。

- (6) Mitteilungen aus Nordamerika, 『リスト全集』第3巻I, 84-85頁。
- (7) 『カタログ』124頁
- (8) Über die nationalökonomische Reform des Königreichs Ungarn, 『リスト全集』第3巻I, 513頁。
- (9) リストとヒースターは建設資金の調達に奔走し、「融資先を求めて14か月間におよそ3000マイル歩いた。」W.O. Henderson, *Friedrich List. Economist and Visionary, 1789-1846*, p. 126; E. Wendler, a. a. O., S. 71. なお、ジラルド (Stephen, Girard, 1750-1831) は没年に米国最大の富豪といわれた。ビドル銀行の融資をうけるに当って、トーマスの弟で共同出資者のエドワード (Edward R. Biddle) を支配人として会社に迎えた。
- (10) Berks County and Schuylkill Journal (1831年12月3日号) より抜粋, 『リスト全集』第3巻II, 686頁。その独訳は『カタログ』125頁, E. Wendler, a. a. O., S. 72-73.
- (11) 『カタログ』125-6頁。E. Wendler, a. a. O., S. 72-73.
- (12) 『リスト全集』第8巻481-3頁。E. Wendler, a. a. O., S. 73-74.

## 5 保護関税運動への参加

リストが着いた頃、米国では対英貿易政策をめぐって自由貿易論と保護関税論とが対立していた。綿と米とタバコの輸出に依存する南部は自由貿易を、工業の発達しつつある北部は関税引上げを要求していた。東部ではニューイングランドの毛織物工業家は保護関税陣営に、海運業者と特にボストンの有力な輸入業者は自由貿易陣営に与していた。

保護関税運動の指導者は2人いた。1人はバルティモアの有力な週刊新聞《Niles' Weekly Reg



ister》の編集者ナイルズ (Hezekiah Niles, 1777-1839) で、リストは渡米以前にこの新聞を知っていた。もう1人はフィラデルフィアの有力市民ケアリーで、出版者、文筆家として知られたアイルランドからの移民である。「中部の中で一貫して保護主義の拠点となった」(宮野啓二) ペンシルヴェニアの製鉄業と毛織物工業がこの運動の支持基盤で、ケアリーはそのイデオロクであった。前述のように、リストは渡米直後の1825年7月20日の祝宴で保護関税運動の有力なメンバーと接触していた。

さて、1824年に議会を通過した関税法は<sup>(1)</sup>、南部の自由貿易陣営から攻撃をうけたばかりでなく、北部の保護関税陣営にとっても満足できる内容ではなかった。関税率引上げの運動は盛り上がり、外国製毛織物に対する関税引上げを内容とする新法案 (Woollen Bill) がマロリー議員によって提出された (1827年1月10日)。この法案は南部の利害の熱烈な擁護者である副大統領カルフーン (J. C. Calhoun) の裁決権によって否決された。そこで次の議会に向けて両陣営の活動はエスカレートした。関税引上げ運動の中心になったのは「ペンシルヴェニア工業技術促進協会」 (Pennsylvania Society for the Promotion of Manufactures and the Mechanic Arts, 会長ティルマン、副会長インガーソル、書記フィッシャー) で、5月14日フィラデルフィアで開かれた総会で、関係諸州では6月中にできるだけ早く会合を開いて、7月30日から8月3日までハリスバーグで開かれる大会 (Harrisburg Convention) に出席する代表者を各州少くとも5人選ぶよう、14州の毛織物関係者に檄を發した<sup>(2)</sup>。

リストが彼の経済学説の根本問題を提起して理論家としての第一歩を踏み出すことになった『綱要』は、このような状況の中で生まれた。その経緯はおおよそ次のようであったと思われる。「協会」の副会長インガーソルがリストに対して、保護関税政策を支持する立場から自由貿易陣営の指導者クーパー (Thomas Cooper, 1759-1939) の主張を反駁する小冊子をやさしい形式で書くことを勧めた。リストは病気の回復をまって、インガーソル

の助言をいれて、依頼された啓蒙的論説をドイツ語でなく英語で、12通の手紙の形式で書いた。12通の手紙の日付けは、1827年7月10日から29日までとなっている。7月24日付けのインガーソルのリスト宛ての手紙によれば、リストが関税問題を取扱った多数の論説を手紙の形式でインガーソルにすでに送ったことが明らかだという<sup>(3)</sup>。また、8月1日付けのハリスバーグからの妻に宛てたリストの手紙には、インガーソルがリストの論説 (手紙) の内容を高く評価して、大会の会期中に公表し、ワシントンの国民新聞とすべての重要な Staatsblätter にインガーソルの推薦文をつけて印刷させようと言ったことが記されている<sup>(4)</sup>。これらの点からみて、リストは論説 (手紙) を書きあげてインガーソルに送ってから、ハリスバーグ大会に出席したのであろう。

12通の手紙はインガーソルが約束したとおり、フィラデルフィアの「国民新聞」 (The National Gazette) に「アメリカ体制」 (The American System) のタイトルで発表されて、大きな反響をまきおこした<sup>(5)</sup>。反響に喜こんだ協会は、著者に感謝を表して11月3日にフィラデルフィアのホテル・マンションハウスで祝宴を開いてリストを招待した。「われわれの賓客のリスト教授はラファ

12通の手紙	執筆の日付け	新聞発表の日付け
第1信	7月10日	8月18日
“ 2 “	“ 12日	“ 21日
“ 3 “	“ 15日	“ 22日
“ 4 “	“ 18日	“ 23日
“ 5 “	“ 19日	9月28日
“ 6 “	“ 20日	“ 29日
“ 7 “	“ 22日	10月1日
“ 8 “	“ 25日	“ 3日
“ 9 “	“ 26日	11月19日
“ 10 “	“ 27日	“ 21日
“ 11 “	“ 29日	“ 24日
“ 12 “	“ 27日	“ 27日

イエットの署名入りの旅券を所持し、政治経済学の学識によって認められております」というインガーソルの紹介に続いて、リストは英語でスピーチをした。このスピーチは上記「国民新聞」をはじめ多くの新聞に掲載され、さらに小冊子として出版された<sup>(6)</sup>。「国民新聞」に発表された12通の手紙も同年12月に『アメリカ経済学綱要』(Outlines of American Political Economy)という表題の仮とじの小冊子として協会によって出版された。リスト自身の記しているところでは、小冊子(『綱要』)は数千部売れ、そのほか15以上の地方新聞に再録されるほどの大きな反響を呼んだ<sup>(7)</sup>。だが、この出版には1つの疑問がある。

この小冊子は2つの部分からなっていた。第1の部分は第1書簡から第8書簡まで8通の手紙とインガーソルの序文、第2の部分は第9書簡から第11書簡までの3通の手紙からなる「アメリカ経済学綱要の付録」で、第12書簡は「国民新聞」に発表されたのに小冊子には載らなかった。その理由はこれまで不明とされていたが、ヴェンドラーは自分で発見した協会の秘書フィッシャーからリストに宛てた手紙(27年12月14日付)の内容にもとづいて説明している<sup>(8)</sup>。「インガーソル氏と私は相談して、あなたの最後の3通の手紙〔第9、10、11書簡のこと〕を序言をつけずに公表することにしました。……12番目の手紙をなぜ〔小冊子に〕掲載しないか、その理由は政治的なもので、これを発表することであなたの目的とわれわれの目的に支障が生じるのではないかとインガーソル氏が考えたからです。」次項で述べる大統領選挙とも絡んで、インガーソル(協会)の立場はリストの出した12通の手紙のうち最初の8通には同意、次の3通にはある種の留保、最後の1通には若干の隔りを示していたというのである。小冊子の表題が最初に新聞に掲載された時の「アメリカ体制」でなく「アメリカ経済学綱要」と変ったのも、この点と関係しているであろう。

リストの論説(手紙)の好評を喜こんだ協会が、「国民新聞」への掲載がまだ完結していない11月3日にリストを祝宴に招待したことは前述したが、協会はさらに11月27日の総会でリストに対

して政治経済学に関する2冊の本を書くように依頼することを決議した<sup>(9)</sup>。1冊は学習用、もう1冊は特に米国の事情を考慮した大きな著作である。彼はこの申し出を早速29日付の手紙でラファイエット将軍に知らせている<sup>(10)</sup>。「ペンシルヴェニア協会はアメリカ国民経済について包括的な著作を書くように私に依頼してきました。私はいまこれからの私の生活がこの国で十分役に立つものと思っています。私の運命のこの幸運な変化は大部分、親愛なる将軍、あなたに負うものです。」このうち大きな方の著作について、彼は「アメリカの経済学者」(The American Economist)という表題の2巻本を構想していた。ワシントンの《Daily National Intelligencer》(1828年2月4日号)に、当時の慣習にしたがって、27年12月22日付の著者の書いた次のような予告が載っている<sup>(11)</sup>。

「……著者の意図はアメリカ体制を科学的に基礎づけ、全体像を描くことにある。本書において著者は経済学上のあらゆる争点を簡単にわかりやすく取扱う。著者は、自由な国がすべてそうであるように、経済学がこの国で適切に、大衆にわかりやすく、また与えられた条件に適用できるようになるよう、この学問をコモンセンスの用語で提示しようと試みる。著者は旧学派の作家によって、ないしはこの国の偉大な為政者や洞察力ある著者によってくわしく説かれたすべての重要な真理を描こうと試みるが、そればかりでなく、高く賛美された体系の誤解と欠陥を暴きだすことも試みる。……この重要な学問はアダム・スミスとジャン・バチスト・セイの作品においては秘密と混乱と矛盾に包まれていたのである。本書は単科大学と総合大学の学生、立法者ならびに政治家、教育を受けた人々、製造業者、農業者、ビジネスマンのために書かれた。」

「アメリカの経済学者」の予約は4月16日で91名と好調だった。財務長官ラッシュもリストに手紙を送って、新著の刊行を歓迎し期待していると記した<sup>(12)</sup>。しかし、この本は結局、完成しなかった。その理由は、彼自身が『国民的体系』の緒言に記しているところによれば、前述の炭坑と鉄道

の事業が著書の完成を妨げたためであった。『リスト全集』第2巻にはその断片が収録されている。

「アメリカの経済学者」は完成しなかったが、同じ28年にリストはみずから、また協会の依頼を受けて、さらに数編の小論を書いている。1つはヴァージニア州知事ジャイルズ (W. B. Giles) 宛ての手紙の形式で「Constitutional Whig」(1828年2月2日号と2月27日号) に発表したもので、これは同紙の1月12日号に掲載された知事の論稿の中にリストを誹謗する文言があったのに対する反駁である<sup>(13)</sup>。リストは28年1月ハリスバーグ滞在中にジャイルズの論稿を読んで即座に反論(第1の手紙, 1月13日付)を書いた。これに続いて2月2日、同地の議会でペンシルヴェニア州の議員を前に「Lecture on the Boston Report, and particularly on its Principles respecting the Landed Interest of Pennsylvania」と題する講演を行なった。これが「ハリスバーグ演説」(Harrisburg Address)で、その内容はボストンの商人リー (H. Lee) が前年に発表した「Report of a Committee of the Citizens of Boston and vicinity opposed to a further Increase of Duties of Importations」(Boston, 1827) を批判したものである。「国民新聞」(2月25日号) に掲載され、『リスト全集』にも収録されている<sup>(14)</sup>。同じくリーの論稿を批判したものに「Review of the Report of a Committee of the Citizens of Boston and vicinity opposed to a further increase of duties on importation」がある。匿名で発表されたが、「北米通信」の記述からも、ドイツ語風の文体や言いまわしからもリストの筆であることは明らかだ、とノッツは述べている<sup>(15)</sup>。

次に下院の「Committee of Ways and Means」の報告 (Mac Duffie Report) を批判してラッシの関税政策を擁護した「Observations on the Report of the Committee of Ways and Means」がある<sup>(16)</sup>。これは協会 (インガーソル) の依頼を受けて書かれ、リストの名前を出さずに協会の報告書として公表されたが、リストの執筆である。最後に、商業・海運委員会の報告 (Cam-

brelang Report) に対する反論「Remarks on Mr. Cambrelang's Report on the Tariff」がある<sup>(17)</sup>。これはインガーソル宛ての2通の手紙 (3月1日付, 3月3日付) の形で「国民新聞」(3月22日号, 23日号) に発表された。

このように、リストは1827年から28年にかけて、『綱要』でスミスとセイおよびこれを祖述するクーパーの世界主義〔万民〕経済学と自由貿易論を批判して、国民経済学の理論の基礎を構築したばかりでなく、これにもとづいて当面の合衆国の関税・貿易政策を批判して、米国の保護関税政策とアメリカ国民主義学派の経済学の形成に少なからぬ貢献をしたのであった。経済学史の上では、サミュエルソンも言うように、リストは米国の経済学者でもあった。

(注)

- (1) 1824年に英国は羊毛輸入関税を1ポンド当り12ペンスから1ペンスと大幅に引下げ、その結果、羊毛の純輸入は1824年の1万100トン (76万ポンド) から1万9500トン (143万7000ポンド) へと2倍近く増加している。なお、この項については、宮野啓二「アメリカ国民経済の形成」およびF. W. タウシグ著、長谷田泰三・安芸昇一訳「米関税史」第1篇第2章を参照。
- (2) Aus dem Readinger Adler: 1827, 『リスト全集』第2巻, 265, 273頁。W. Notz, a. a. O., S. 239.
- (3) 『リスト全集』第2巻21頁。この手紙は『リスト全集』には収録されていない。
- (4) 『リスト全集』第8巻351-352頁。
- (5) 12通の手紙の執筆の日付と掲載された新聞の日付は61頁の表のとおり。
- (6) Philadelphia Speech. Account of the dinner given to Professor List by the Pennsylvania Society for the Encouragement of Manufactures and the Mechanic Arts, at the Mansion House, Philadelphia, Nov. 3, 1827 『リスト全集』第2巻157-172頁。
- (7) 『国民的体系』10頁。
- (8) E. Wendler, a. a. O., S. 79.
- (9) 協会はこの時、リストを議員として、また大学教授として推薦し、その実現のために援助することも決議した。
- (10) 『リスト全集』第8巻352頁。
- (11) W. Notz, a. a. O., S. 249-250, E. Wendler, a. a. O., S. 86-87. 中型判2巻8分冊 (6週間に1分冊ずつ)、予約申込みが十分な数に達してから1年以内に完結の予定で、定価は2巻で5ドル、第1巻を受けとった時に支払えばよい、という条件だった。
- (12) 1828年6月18日付。『リスト全集』第8巻354頁。
- (13) Letters to Governor Giles. 『リスト全集』第2巻176-181頁。
- (14) Harrisburg Address. 『リスト全集』第2巻186-206頁。
- (15) W. Notz, a. a. O., S. 247. ノッツによれば、ハースト

(M. E. Hirst) はこの論稿を、ケアリーの「An Examination of the Report of a Committee of the Citizens of Boston and its vicinity, opposed to a further increase of duties on importations. By a Pennsylvanian.」(Philadelphia, 182) と混同していたという。

(16) 『リスト全集』第2巻207-231頁。

(17) 『リスト全集』第2巻232-239頁。

## 6 大統領選挙。米国を離れてヨーロッパへ

リストが渡米する前年の1824年は大統領選挙の年であった。この選挙ではどの候補者も当選に必要な多数を獲得することができず、憲法の規定に従って当選者の決定は下院に委ねられた。投票で獲得した選挙人はジャクソンが99人、J. Q. アダムズが84人であったが、下院の多数はアダムズを大統領に決定した。南部諸州の利害を熱烈に擁護するカルフーンが副大統領に選ばれた。

大統領がクレイ (H. Clay) を国務長官に任命した時、民主共和党は分裂した。アダムズとクレイの支持者は国民共和党 (のちのウィッグズ) を、ジャクソンとその仲間らは民主党を結成した。前者は合衆国憲法の弾力的な解釈と連邦政府主導の公共事業 (道路と運河の建設) の遂行と保護関税を主張し、後者は憲法の厳密な解釈と各州を主体とする公共事業の遂行を主張した。次の選挙に向けて両派の準備が進み、米国の政治風土はモンロー大統領当時 (1820-24) の「Era of good feeling」から「Era of ill feeling」に変わった。これがリストが渡米した頃の状況で、両陣営の対立は28年の大統領選挙を迎えて一層エスカレートした。

28年の選挙は国民共和党のアダムズ、ラッシュと民主党のジャクソン、カルフーンの間で争われた。リストはアダムズ、クレイ、ラッシュと個人的に交流があり、彼らの主張する「アメリカ体制」に共鳴していたので、当然、アダムズ陣営につくものと見られていた。しかし、リストはジャクソンを支持した。その理由は主としてジャクソンの庶民的な人柄に対する共感と、アダムズの政府の腐敗に対する反感にあったと思われる。

すでに「アドラー」紙 (1827年6月5日付け) の「大統領選挙について」という論説の中で、大

統領の任期を延長して選挙を8年ごとにやっては、という一部の意見に關説して、「あらゆる国家の歴史が示すように、1年以上職にとどまる権力はしだいにその職を終身、ついには世襲的に保持することになる」「大統領は4年の任期経過後に再選されえない、という規定があったらもっと賢明であったであろう」と基本的立場を表明している<sup>(1)</sup>。1年後には (1828年6月24日付け) 端的に「アダムズとクレイの間で合衆国の大統領と国務長官の職を取引したことが、われわれが J. Q. アダムズの再選に反対する主な理由の1つである」と述べている<sup>(2)</sup>。アダムズが東部海港都市の貿易商人や南部のプランターを敵に回すのを恐れて保護関税を明確に主張しなかったことも、リストの反対理由であった。「アドラー」紙の伝統的な反連邦主義からしても、連邦政府主導の公共事業の遂行を主張するアダムズ派には組しえなかった。

東部のアダムズ支持者と南部、西部のジャクソン支持者がほぼ伯仲するなかで、ペンシルヴェニアのドイツ系農民とドイツ系アメリカ人の動向が28年の大統領選挙の結果を左右する要因であったことを考えると、「アドラー」紙の編集者として彼らの間に大きな影響力をもっていたリストの果たした役割は無視できない<sup>(3)</sup>。ペンシルヴェニア州だけでドイツ系アメリカ人向けの27紙のうち17紙がジャクソン支持に回ったが<sup>(4)</sup>、これは「アドラー」紙の影響力の大きさを示している。のちにリストがホワイトハウスにジャクソンを訪ねた時、大統領は「ペンシルヴェニアのドイツ系市民が自分に対して示してきた変らない忠誠」を認めたという。

1828年秋にはリストは望郷の念にかられていた。「私はこの6週間またしても望郷の念にかられて、アメリカでの仕事はどうでもよくなっています。祖国は私には歩行障害の子供を抱えた母親のようです。子供の歩行障害がひどいほど母親はその子を可愛がります。私のすべての計画の背後にあるものはドイツであり、ドイツへ帰ることです。<sup>(5)</sup>」文筆活動で得た名声も大統領選挙の勝利も彼の望郷の念を和らげなかった。小スクールキル鉄道の着工を機会に、1830年6月初めに家族と



ともにレディングからフィラデルフィアへ移った。会社の無煙炭の売りこみと米・仏間の通商拡大のために私費でヨーロッパへ行こうと決心して、10月27日に米国の市民権を取得した<sup>(6)</sup>。

この年(1830年)の10月18日(19日?)から23日までリストはワシントンに滞在した。大統領に旅行計画を話し、在ドイツ米国総領事に任命してもらうように働きかけるためである。10月20日付けの大統領宛ての手紙の草稿にはザクセン、バイエルン、ヘッセン＝カッセル、エルザスの米国総領事任命を願いでている。また、10月21日付けのヴァン・ビューレン宛ての手紙の草稿では、米国総領事としてやろうとしている仕事を箇条書きにしている。11月8日、大統領は国務長官の建言を容れてリストをハンブルク米国総領事に指名した<sup>(7)</sup>。あとは上院の承認を得れば本決まりである。リストはヴァン・ビューレンから全権委任の書簡(11月15日付け)と500ドルの旅費、旅券を受けとり、18日にヴァン・ビューレンに返事を送った。「ハンブルク総領事の誓約書を同封いたします。明日ニューヨークへ発ち、そこで今月20日に客船エリー号に乗船します。」

11月20日にニューヨークを出港したリストは、4週間の嵐の航海ののち12月21日に無事ル・アーブルへ入港した。22日付けの妻への手紙に「昨日無事到着、今日まで当地で休息をとり、明日パリへ発ちます。途中ルーアンに1日寄るので、パリへ着くのはクリスマスになります。」とあり、航海中のニュースとして、ポーランドの独立宣言、スイスの諸州の旧憲法破棄、ロシアで起こった暴動などを記している<sup>(8)</sup>。彼は最初、任務の遂行について楽観的であった。多数のフランス政府高官とも会い、自分の主張を印象づけるために「フランス経済改革案」(«Idées sur les réformes économiques, commerciales et financiers, applicables à la France»)を«Revue Encyclopédique»(1831年3月、4月、11月号)に発表して、鉄道網の建設がフランスの経済改革の中心問題であることを主張した<sup>(9)</sup>。ドイツの旧秩序に抗してパリへ移ってきたベルネ(L. Börne)やハイネ(H. Heine)と知り合ったのもその頃である。

リストがフランスへ発ったあと、米国の上院は31年2月8日に37対6で総領事指名を拒否した。拒否の理由は恐らく、リストはヴェルッテンブルクで有罪の判決を受けており、ハンブルクでは「好ましからぬ人物」(persona non grata)である、という駐仏米国大使ライヴズ(W. Rives)の報告、前任総領事カスバート(J. Cuthbert)が辞任を望まなかったこと、国務省内で人事の交替が進んでいたこと、などであったと思われる<sup>(10)</sup>。米国の上院がリストの総領事指名を拒否し、ハンブルク政府も受入れを拒否したことが、ヨーロッパでのリストの仕事を失敗させた。4月初め頃パリを離れてストラスブールへ、さらにバーデン・バーデン、バード・リッポルザウでリュウマチに悩む身体を休ませた時には、すでに自分の目論見が失敗に終わったことを認めていたようである<sup>(11)</sup>。7月にもう一度パリへ戻ったが、最後の望みもかなえられず、10月10日にル・アーブルで乗船して米国へ帰った。

1832年7月13日ジャクソン大統領はリストをバーデン総領事に指名した。これは無給の一時的な名誉職であつたらしい。いずれにしても、これでリストがドイツへ帰ることが可能になった。そこで1832年夏、一家は最終的に米国を離れてヨーロッパへ向かった。妻の健康の回復のために一家はハンブルクに1年ほど滞在し、翌33年6月ライプツィヒへ移った<sup>(12)</sup>。この総領事に任命されて、37年8月までその職に就いていたが、米国政府の役人としての活動は実質的にはここまでであった。43年から45年までシュトゥットガルト領事に任命されたが、この時にはすでにリストの関心は別の問題に移っていた。

(注)

(1) 『リスト全集』第2巻272-3頁。

(2) 『リスト全集』第2巻16頁。こうも論じている。「大統領がアメリカの国民的産業の大問題に一言も触れていないのは、まことに驚くべきことだ。」(1827年12月18日付け)「アダムズは関税率の問題に対してははっきりと、包み隠さずに意見を表明していない。彼は東部の商人にも南部のプランターにも反対しようとせず、彼らの嫌がる問題に触れるのを警戒している。」(1827年6月19日付)

(3) 「アドラー」紙の影響力を中和させるために、アダムズ陣営は«Berks County Telegraph»を発行した。その他、

- 両派の宣伝合戦については、『リスト全集』第2巻482-3頁。
- (4) E. Wendler, *a. a. O.*, S. 97-98.
- (5) 1828年10月5日付 E. Weber 宛ての手紙の草稿。『リスト全集』第8巻355頁。『カタログ』128頁, E. Wendler, *a. a. O.*, S. 109.
- (6) 1830年8月9日付のヴァン・ビューレン宛ての手紙には、フランスからの重要なニュース（国内の経済開発）のことが記されている。リストにはフランスの現状を見たい気持ちが強かったと思われる。
- (7) リストがヨーロッパへ行ってやろうとしていた仕事は、タバコ、砂糖、鯨油、油、豚、ラード、塩魚のフランスとの交易、無煙炭のフランス、オランダ、ハンザ都市への売りこみ、ル・アーブル～ストラスブール間の鉄道建設計画の打診、オーストリア、ドイツ諸邦での鉄道建設の打診、ドイツ人移民（ミシガン地域への）の勧め、「経済学のさまざまな体系の批判」（著書）を完成させるためにドイツとフランスの図書館を利用すること、などである。なお、大統領がリストを総領事に指名したのは11月8日であるが、リストは11月6日付のヴァン・ビューレン宛ての手紙で「次のアーブル行きの客船でフランスへ荷物を送り、ハンブルク総領事の義務に入るのに必要な準備をしました」と記している。
- (8) 『リスト全集』第8巻367-8頁。
- (9) この論稿は『リスト全集』第5巻59-91頁に収録されている。
- (10) リストは1831年1月10日付のパリからハンブルク総領事カスパートに宛てた手紙で、自分がハンブルク総領事に指名されたことを伝え、イギリス炭1シャルドロン（36ブッシュェル）の価格、標準的な部屋の冬の暖房費、1コード（8×4×4フィート）の薪の価格、ハンブルク・コードと英米コードの比率をたずねている。『リスト全集』第8巻373頁。ヴァン・ビューレンは1831年2月17日付の手紙でリストに、上院が総領事指名を拒否したことを知らせた。
- (11) 『リスト全集』に収録されているこの間のリストの手紙の発信地は、4月8日ストラスブール、5月初パリ、5月15日ストラスブール、6月18日バーデン、ラシュタット近郊である。最後の手紙には、先月来、健康回復のためにこの温泉地にいること、あと4週間ここと隣接するバード・リッポルザウに滞在するつもりであると記されている。なお、この手紙はバイエルンの鉄道の専門家フォン・バーダーに宛てたもので、リヴァプール～マンチェスター鉄道の成功のことが書かれている。
- (12) 1833年6月にライプツィヒへ移ったリストは、同年秋「ザクセンの鉄道制度論」を発表して、ライプツィヒ～ドレスデン鉄道の建設に関わることになる。前掲拙稿73頁以下を参照。